

## [研究ノート]

## 「世界史探究」における唐代の記述をめぐる一考察

中 田 美 絵

## 要 旨

本稿は、令和4年度から適用された高等学校の「世界史探究」教科書における唐代の記述を考察するものである。まず、「指導要領解説」を参照しつつ、各教科書の構成を理解したうえで、唐代がどこに組み込まれているかを確認した。次に、地域設定に関わる記述に注目した。「世界史探究」では、「中央ユーラシア」の地域概念が積極的に取り入れられており、唐代史も中央ユーラシア史の枠組みの中で捉え直す傾向にあることから、近年の歴史学の研究が反映されていることが確認された。その一方で、「探究」しづらい記述もあり、教育現場での工夫が必要となる箇所が見られることを指摘した。また、仏教やジェンダーに関わる記述に見られる傾向や問題点を述べ、教育現場で補足すべき内容を具体例として挙げた。

## はじめに

令和4（西暦2022年）4月1日以降、高等学校の第1学年に入学した生徒を対象に、従来の「世界史B」にかわり「世界史探究」が適用されている。「【地理歴史篇】高等学校学習指導要領（平成30〔2018〕年告示）解説〔平成30年7月（令和3年8月 一部改訂）〕<sup>1)</sup>（以下、「指導要領解説」と略す）によれば、「世界史探究」における改善・充実の要点は、主に、ア「『社会的事象の歴史的な見方・考え方』に基づく学習活動の充実」、イ「『主題』や『問い』を中心に構成する学習の展開」、ウ「単元や内容のまとまりを重視した学習の展開」、エ「世界の歴史の大きな枠組みと展開を捉える内容の構成」、オ「資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習」、カ「歴史的経緯を踏まえた地球世界の課題の探究」である〔pp.26-28〕。アは全体を貫く方向性を示し、ウ・エ・カは過去の歴史を大きな枠組みのもとでとらえること、かつそれを踏まえて地球規模の課題を探究するという大きな方針を示す。具体的な学びに関しては、イやオにみられるように、「世界史探究」では、課題（問い）を設定し追究する学習が求められ、その課題（問い）の設定と追究を促す資料を活用することが求められる点に特色がある。このことは、高校の教育現場のみならず、大学における教職課程科目においても、こうした変更をふまえた授業が要求されることを意味する。では、こうした改訂に基づいて、具体的な各項目の中身の学びはどのように変わっていくのであろうか。本稿では、「世界史探究」に見られる新

たに加わった特徴とは何かを探るべく、その第一歩として、筆者の専門でもある唐代史の記述に着目してみたい。

まず、1.「世界史探究」の教科書の構成を整理し、唐代史がどの箇所に組み込まれているかを確認する。次に、2.では、地域設定に関わる記述に注目してみたい。近年、前近代史を取り扱う歴史研究においては、「中央ユーラシア」や「東部ユーラシア」といった新しい地域概念が提唱されている。これにより、中国の歴史をユーラシア全体の歴史の中に位置づけ、相対化する傾向が強まっている。こうした流れは、教科書にも反映されているが、特に唐代史の記述の場合はどういった特徴がみられるかを探ってみたい。そして、3では、実際の教育現場において補足すべきと考える内容を数例あげてみたい。

## 1. 「世界史探究」における唐代史の記述

「指導要領解説」によれば、「世界史探究」は、「A 世界史へのまなざし」「B 諸地域の歴史的特質の形成」「C 諸地域の交流・再編」「D 諸地域の結合・変容」「E 地球世界の課題」の五つの大項目から構成される。B～Dのいう「諸地域」とは、「それぞれ一定のまとまりをもってはいるものの、独自の固定的な世界を形成しているわけではなく、流動的なものである」という。そして、「そのことを踏まえて、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容を経て、世界は一体化に向かい、地球世界を形成していったことをより明確にする」とする [pp.271-272]。そして、本稿で取り上げる唐代は、この大項目「B 諸地域の歴史的特質の形成」を構成する3つの中項目のうちの「諸地域の歴史的特質」のなかの小項目に含まれている。中項目「諸地域の歴史的特質」のねらいは、「諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、東アジアと中央ユーラシア、南アジアと東南アジア、西アジアと地中海周辺の歴史的特質を理解できるようにする」[p.290]と示されるように、これらの諸地域を軸に、歴史的特質が形成される過程に着目した学習内容が構成されている。

以下の表1は、唐代の記述が教科書のどの部分に含まれるかを示したもので、それぞれの大項目と中項目のタイトル、および唐代を含む項目（小項目）を掲載している。各欄の上段が大項目、中段が中項目、下段が小項目にあたる。また、取り上げる教科書については、以下、次のように統一して用いることとする。

- ①東書（東京書籍 世界史探究 世探 701）
- ②実教（実教出版 世界史探究 世探 702）
- ③帝国（帝国書院 新詳世界史探究 世探 703）
- ④山川詳説（山川出版社 詳説世界史 世探 704）
- ⑤山川高校（山川出版社 高校世界史 世探 705）
- ⑥山川新（山川出版社 新世界史 世探 706）

⑦第一（第一学習社 高等学校 世界史探究 世探 707）

なお、①～⑦いずれも令和6〔2024〕年発行のものである。

表1 「世界史探究」教科書の唐代史記述

①東書	第1編 諸地域の歴史的特質
	第5章 東アジアと中央ユーラシア
	3 隋唐帝国と東アジア 隋唐時代／唐代の社会と文化／唐の滅亡／朝鮮半島と日本列島／唐とチベット・東南アジア／唐の国際秩序
②実教	第1部 諸地域の歴史的特質の形成
	第2章 東アジアと中央ユーラシア
	4 胡漢融合帝国の誕生 胡漢融合帝国／中国の分裂／南北の対立／魏晉南北朝時代の文化／隋の中国統一／唐の成立とその支配体制／唐の社会と経済／唐の文化と生活／唐と周辺諸民族／唐の変動と滅亡／朝鮮半島情勢の変化／日本列島の動向／8～9世紀の日本と東アジア／ACTIVE ②漢～唐代の国際関係
③帝国	第2部 諸地域の歴史的特質の形成
	1章 東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質
	5節 ユーラシアの変動と東アジア 中華の分裂と遊牧民の進出／南北朝とその社会／隋唐世界帝国の形成／唐代の社会と経済 「文化から見る当時の社会」国際色豊かな唐の文化 南北文化の融合 晋唐文化／東アジア諸国家の形成／唐の体制転換とユーラシア東方の変動 探究 TRY ユーラシア東部の国際関係 ―「中華」の王朝とその周辺
④山川 詳説	第I部 諸地域の歴史的特質の形成
	第2章 中央ユーラシアと東アジア世界
	4 東アジア文化圏の形成 隋から唐へ／唐代初期の制度と文化／唐と近隣諸国／唐の変容と五代／突厥とウイグル／ソグド人
⑤山川 高校	第I部 諸地域の歴史的特質の形成
	第2章 中央ユーラシアと東アジア世界
	4 東アジア文化圏の形成 突厥・ウイグル／ソグド人／隋から唐へ／唐代の制度と文化／唐と近隣諸国／唐の変容と五代 探究しよう 唐の女性はどうのような生活をしていただろうか
⑥山川 新	第II部 諸地域の歴史的特質の形成
	第3章 アジア諸地域の国家と社会
	4 隋唐帝国と東アジア 隋から唐へ／唐代の制度と文化／唐と近隣諸国／資料から考える 東アジア文化圏／唐の動揺
⑦第一	第2編 諸地域の歴史的特質の形成
	第3章 諸地域の歴史的特質
	5 唐と近隣諸国の動向
	①隋唐帝国の成立と諸制度：突厥の台頭／隋・唐帝国の成立／世界帝国・唐／唐の諸制度 ②国際化する東部ユーラシア：唐の国際関係／シルクロードと国際都市・長安／唐帝国の縮小 テーマ3 唐の文化 ③東部ユーラシアの変動：安史の乱と唐帝国の変容／陸と海の変動／唐の滅亡

「指導要領解説」によれば、「唐と近隣諸国の動向については、遊牧国家との接触を背景に隋・唐が成立したこと、唐の支配体制、近隣諸国との関係を扱い、唐による広域支配の安定と、

日本や新羅、渤海などが唐の政治制度や文化を取り入れることで国家体制の整備を進めたことに気付くようにする。また、パミール高原を挟む東西の地域にトルコ系王朝が移動・定住することで、多くの地域でトルコ系の言語・文化が広がり、やがてイスラームを受け容れたことに触れる」[p.298]とあるように、唐代の記述では、諸制度や支配体制のほかに、遊牧国家を含む近隣諸国との関係にも重点が置かれていることがわかる。表1の各教科書の中項目のタイトルや小項目をみれば、従来の「東アジア」に加え、「中央ユーラシア」や「東部ユーラシア」といった広域の地域区分が積極的に用いられていることからわかる。なお、⑥山川新と⑦第一については、中項目のタイトルに「中央ユーラシア」は使用されていないが、後述するように教科書のなかに言及がないわけではない。「世界史B」のころより、帝国書院や実教出版などでは既に「中央ユーラシア」が用いられていたが、「世界史探究」ではより広く使用されたことが分かる。こうした教科書における「中央ユーラシア」の浸透は、森安孝夫2007・2011のなかで、それまで曖昧な地域概念であった「中央ユーラシア」の定義がなされたことが影響するのかもしれない<sup>2)</sup>。

また、②実教と③帝国については、隋唐期に先行する魏晉南北朝期の分裂・融合の内容が併せて記され一つの小項目を構成している。これは、この時期の遊牧民の移動・混乱のなかから隋・唐が成立するというつながりが意識されており、唐が中央ユーラシアの遊牧民との密接なつながりのなかから生まれた王朝であることがわかるようになっている<sup>3)</sup>。また、②実教では、「ACTIVE ②漢～唐代の国際関係」として、漢から唐にいたる時期の東部ユーラシアにおける国際関係について、諸資料を用いて考える実践的項目が設けられている。

唐代史といえば、「唐建国—太宗の治世—女帝の出現—玄宗の統治—安史の乱—財政国家への変貌—藩鎮の勢力伸長—黄巢の乱—唐崩壊」といった大まかな流れがイメージされる。こうした、いわゆる唐代史の大まかなプロットは、明治期の那珂通世・藤田豊八・桑原隲蔵らにおいても既にみられたものでもある。また、それ以降の戦後日本の隋唐史研究においても、社会経済史や政治制度史が主流を占め、一方で、本来は唐代と深くかかわるはずの内陸アジア史研究とは切り離され、中国史をベースとする隋唐史研究と内陸アジア研究とはリンクしない時期が長く続いた[石見2010、pp.24-29]。しかし、近年そうした研究状況は、資料状況の好転も関係して変化を遂げている。「中央ユーラシア」の遊牧民やオアシス民を中国の「周辺」とみなすのではなく、むしろそれらとの密接な関係の歴史のなかに唐をみなすようになっており、唐代全般を扱う概説書においてもこうした傾向が顕著にみられようになった<sup>4)</sup>。教科書において、唐を中国王朝として中国史の流れの中に置きつつも、「中央ユーラシア」とのかかわりが強く意識されたのも、そうした研究動向が反映しているのであろう。とはいえ、諸地域との関係の部分を除けば、上述の従来の唐代のプロット自体はそのまま継承されており、今後、近年の研究成果にもとづく見直しが必要となろう。宗教などの項目についていえば、従来通り文化史の枠組みにとどまり、それがたとえば政治にかかわるといった側面はみられない

ままである<sup>5)</sup>。また、負のイメージで語られてきた武則天の評価は大きく変わり、教科書にも反映されているが、唐代史研究においてジェンダーの視点を取り込んだ議論は十分にすすんでおらず、教科書に反映される段階には至っていない<sup>6)</sup>。宗教やジェンダーに関わる項目については、3で改めて言及したい。

## 2. 地域設定をめぐる変化と唐代史研究

### (1) 「中央ユーラシア」について

表1に示されるように、⑥山川新と⑦第一を除けば、中項目には「中央ユーラシア」という地域概念が用いられていることが分かる。ただし、⑥については、小項目「2北方ユーラシアの動向」の補足事項のなかに「中央ユーラシア」の説明があり、また⑦については、第2編第2章「古代文明の歴史的特質」の「地理風土」のなかで「中央ユーラシア」の説明を行っている。なお、この「地理風土」では、「東アジア」もとりあげられ、そのなかで「東部ユーラシア」もあわせて説明されている。「東部ユーラシア」については、(2)で改めて述べたい。

唐代に限らず、前近代の中央ユーラシアの歴史とも深くかかわる「シルクロード」については、シルクロードで活躍するソグド人がもたらした文化的影響力などが読み取れるようになっている。例えば、③帝国の「文化から見る当時の社会」国際色豊かな唐の文化」や⑦第一の「テーマ3唐の文化」のなかで、イラン系の人々がもたらした「胡食」をはじめとする様々な文化が紹介されている。また、地図上で「シルクロード」を図示したものとしては、従来通り東と西の文明圏を繋ぐシンプルなものだけでなく [②実教]、「ネットワーク」として描くようになったことが注目されよう [⑦第一<sup>7)</sup>]。③帝国でも、シルクロードは、「東西だけでなく南北にもつながった、陸上交通路の網の目」であると明記している<sup>8)</sup>。これらは、シルクロードを「線」ではなく「面」、すなわちネットワークを包含する地域としてみる近年の研究成果が反映されたものとみられる [森安 2007、pp.62-68]。

1でも述べたように、地域設定の大きな変化は、近年の唐代史研究に顕著にあらわれている。かつては、いわゆる唐王朝の歴史を描くときには、中国史の流れの中に位置づける政治・経済の記述が中心となり、いわゆるシルクロードや遊牧国家にかかわる歴史は別のもので描かれることが多かった。ところが、資料状況の変化、グローバル化の進展などを受け、唐を中国史の中で完結させるのではなく、ユーラシア全体の歴史のなかでとらえ直す動きが高まってきた。

こうした広域世界の中にある唐への理解が進む近年の傾向の中で、注目してみたいのは、教科書における安祿山およびそれが引き起こした安史の乱に関する記述である。まず、教科書①～⑦ではどのように記載されているか列挙しておきたい。



- ①東書：玄宗の晩年には楊貴妃の一族が実権をにぎり、この状況のなかで、755年、イラン系ソグド人の安禄山と、その部下の史思明が反乱をおこした（安史の乱）。
- ②実教：755年、3つの節度使を兼任したソグド系の安禄山とその武将の史思明が、楊貴妃一族の専横に反発して反乱をおこした（安史の乱）。
- ③帝国：唐の軍隊の主力は、服属したトルコ・ソグドなどの騎馬軍団であり、なかでも**両者の血を引く節度使安禄山**は強力な軍隊を指揮していた。玄宗の晩年、楊貴妃の一族が実権を握ると、河北で自立を強めていた安禄山は、**ソグド系武将の史思明**と共に挙兵した（安史の乱）。
- ④山川詳説：強大な力をもつようになった節度使が安史の乱と呼ばれる反乱をおこし、唐は危機におちいった。  
「安史の乱」に対する注：中心人物であった安禄山・史思明の名からこのように呼ばれる。彼らはソグド人や突厥人の血をひいていた。
- ⑤山川高校：節度使の安禄山と部下の史思明が、755年に反乱をおこした（安史の乱）。
- ⑥山川新：玄宗の晩年には彼の寵愛を受けていた楊貴妃の一族が実権を握り、それに対する反発から節度使の安禄山とその武将の史思明が反乱をおこした（安史の乱）。  
「安禄山」に対する注：ソグド人の父と突厥人の母をもつ武官で、北方の3節度使を兼ねていた。
- ⑦第一：755年、唐の東北方面を任されていた節度使の安禄山が反乱をおこした（安史の乱）。**突厥とソグド人の血を引いて強力な騎馬軍団を従えていた安禄山**により、唐は洛陽・長安をまたたく間に失い、都を追われた玄宗は退位した。

教科書の多くが、安禄山が、突厥人（トルコ人）とソグド人の血を引くことを記している。このことから安禄山が中央ユーラシアに何らかの関わりをもつ存在であることはわかるようになっていく。ただし、この情報からは、そのことがもつ歴史的意義を理解することは容易ではない。i. 通常オアシス民あるいはオアシス出身の国際商人であるソグド人がなぜ武人化しているのか、ii. ソグド人と突厥人の血を引くという安禄山は果たしてどこで生まれたのか、といった疑問がわいてくるであろう。この点については、たとえば、『市民のための世界史 改訂版』の説明をみてみよう。同書は、大学教養課程の世界史教科書として編集されたもので、従来型の世界史を履修し個別事項の暗記に終始した学生が、世界史の大きな流れを理解するのに役立つものとされる。安禄山についての記述は次のとおりである。

遊牧社会のなかで遊牧民の騎射技術を身につけたソグド人は、安禄山に代表されるように、唐後半期の政治・軍事に大きな影響力をもつ存在となっていた [p.59]。

まず前提として、ソグド人のなかには遊牧社会に入っていたものがあること、それらは次第に遊牧民の騎射技術を身につけるようになったことが確認される。そして、安祿山がそうした遊牧社会に身を置いていたソグド人であることが読み取れる記述になっている。本来、ソグド人は遊牧民ではなくオアシス民であるが、その中から国際商人としてユーラシアの東方へ活動の場を広げ、中国だけでなく遊牧国家にも入り込んでいった。遊牧社会に入り込んだソグド人は次第に遊牧民化してゆき<sup>9)</sup>、さらに、そうした遊牧国家から唐にやってきたソグド系の人々が、武人として活躍するにいたる。以上のような背景の説明があつてはじめて安祿山が突厥人とソグド人の血を引くということ、唐で節度使になった経緯が理解されよう。大項目Bが、諸地域相互の関係を重視するのであれば、また、「指導要領解説」において、「東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互の関わりなどに着目し…」[p.297]とあることもふまえるならば、安祿山は、中央ユーラシアにおける遊牧民やソグド人の歴史的動向のなかで理解されるだけでなく、さらには遊牧民から見て「南方」の中国の農耕世界との関わりを理解するうえでの格好の材料である。教科書においては以上のことを導き出せる記述であることが望ましい。

また、安祿山・史思明が起こした安史の乱は、「中央ユーラシア型国家」の出現という観点からも重要な出来事である。「中央ユーラシア型国家」は、かつては「征服王朝」と呼ばれていたもので、遼・西夏・金のように、遊牧民が遊牧地帯に軸足を置いたまま農耕地帯をもおさえた国家を指し、支配する対象にあわせて柔軟で効率的な支配を行ったとされ、モンゴル帝国はその完成形とされている。「中央ユーラシア型国家」は、唐滅亡後のユーラシアの東部における多極化のなかであらわれてくるものであるが、もし安史の乱が成功していれば、これらに先行する「中央ユーラシア型国家」(「安史王朝」)となる可能性を秘めたものであったことが指摘されている。ただし、それが成しえなかったのは、中央ユーラシア側の遊牧騎馬民族勢力が一本化して「南方」を支配する「システム」が熟していなかったためであるという。つまり、時期尚早であったという点において、いわば「早すぎた征服王朝」であったとする[森安2002、pp.157-163；同2007、pp.307-310]。すなわち、このようにみれば、安史の乱は、「中央ユーラシア型国家」の遼・西夏・金・モンゴル帝国の登場との連続性のなかでも理解すべきものである。しかし、遼・西夏・金・モンゴル帝国をとりあげる大項目「C」では、③帝国が「中央ユーラシア諸勢力の自立 キタイ・女真・西夏」、⑦第一が「中央ユーラシア型国家と盟約の時代」の名称でそれぞれ小項目を立てているものの、その連続性が意識された記述にはなっていない。大項目「B」と「C」を跨ぐ内容となるため、教科書の記述上、安史の乱からの連続性を示すことが難しいところもあるだろう。ただし、安史の乱を中国史の文脈でのみとらえることへの批判もあるように[森安2002、森部2013など]、ユーラシアの一体が強調されるモンゴル帝国の出現について、その歴史的過程を理解するうえでも、教育現場において、安史の乱の歴史的意義を中央ユーラシア史の視点から「探究」する必要があるだろう<sup>10)</sup>。

## (2) 「東部ユーラシア」について

「中央ユーラシア」に加えて、近年、「東部ユーラシア」（「ユーラシア東部」、「ユーラシア東方」など）の地域概念が提唱されている。それが指す空間や性格に差異は見られるものの、大まかにいえば、中国を中心とし漢字・律令・儒教・漢訳仏教などを共有する政治的・文化的まとまりのもつ「東アジア世界」とは異なり、中央ユーラシアの遊牧集団・王朝と中国王朝双方の歴史展開に着目するものであるとされ、東アジアだけでなく中央ユーラシアの東側部分や東南アジアの一部も含むとされる<sup>11)</sup>。中国文明の求心力によって形づくられる世界ではなく、多種多様な言語・生業・宗教・習俗などを有するさまざまな種族・人間集団が生活する多元的な空間であるところに特徴がある〔古松 2020、pp.13-15 など〕。

こうした研究動向を反映するように、たとえば、③帝国では、「ユーラシア東部の三重構造」を図式化し、「ユーラシア東部」が、北から「草原地帯〈遊牧〉」・「華北〈畑作〉」・「江南〈稲作〉」から構成されていることを紹介している。そのほかにも、小項目の中に「唐の体制転換とユーラシア東方の変動」を立て、「ユーラシア東方」という表現を用いている。そして、「探究 TRY」として「ユーラシア東部の国際関係―「中華」の王朝とその周辺」という項目も設けている。⑦第一では、まず、大項目 B の中項目「第2章 古代文明の歴史的特質」の「東アジア」の解説のなかで、あわせて「東部ユーラシア」の地域区分があることが述べられている<sup>12)</sup>。また、⑦第一は、小項目「5 唐と近隣諸国の動向」のなかで「②国際化する東部ユーラシア」や「③東部ユーラシアの変動」といった節のタイトルとしても用いている。ただし、「東部ユーラシア」の指す地理的・時間的空間については、研究者間において認識にズレがあり、統一見解がないまま今に至っている<sup>13)</sup>。今後もこの地域概念についての議論は続くと思われるが、教育現場にも取り入れられる日も遠くはない。今後の研究における動向を注視する必要があるだろう。

## 3. 仏教・ジェンダーに関わる記述

### (1) 仏教の記述

宗教・思想や文化・芸術などを扱う文化史は、これまでの高校の世界史においては、芸術家や作品の名前の羅列と暗記という性格が強く、かつ政治や経済とは切り離された領域として扱われてきた、という批判がある〔桃木 2022、p.241〕。「世界史探究」における唐代史の文化に関する記述についていえば、シルクロード交易で活躍していたソグド人などの動向をふまえ、彼らが中国にもたらしたモノ（音楽・服飾・舞踊・胡食）などへの言及が増えた〔特に③帝国は「文化から見る当時の社会 国際色豊かな唐の文化」、⑦第一は「テーマ3 唐の文化」という項目を設け、画像を多く用いて解説している〕。では、政治と深くかかわり、また中国の周辺にも大きな影響力を持った仏教についてはどのように扱われているだろうか。以下、唐代に



かわる小項目中の仏教関連の記述をあげておきたい。

表2 唐代の仏教に関する記事

	小項目	
①東書	隋唐帝国と東アジア	【唐代の社会と文化】 宗教では、仏教が前代につづいて発展した。玄奘や義浄らのように仏典を求めてインドにおもむく僧も多く、仏典の漢訳と教理の研究がすすんだ。浄土宗や禅宗などの新しい宗派も発展し、最澄と空海が日本に伝えた天台宗と真言宗は、平安時代の仏教に大きな影響を与えた。
②実教	胡漢融合帝国の誕生	【唐の文化と生活】 思想・宗教の面では、儒教・仏教・道教の三教が、隋唐になると密接に関係しあいながらそれぞれ独自に発展をみせるようになった。……仏教は、前代以来、貴族や帝室の保護のもと繁栄した。玄奘や義浄などのようにインドに直接おもむく僧も多かった。彼らのもたらした仏典は漢訳され、教理の研究も進展したため、密教や中国独自の浄土宗・禅宗などの宗派も成立した。
③帝国	ユーラシアの変動と東アジア	【南北文化の融合 晋唐文化】 多様な文化に寛容な遊牧民が主導権を握っていたこの時代は、さまざまな宗教・思想も活発に展開した。なかでも紀元前後に伝来した仏教は、4世紀以降、中央アジア出身の僧仏図澄・鳩摩羅什によって華北の諸国で盛んになり、江南でも貴族たちに広まった。北朝から唐にかけて、巨大な石窟寺院がつくられるなど仏教は国家的保護を受けて栄え、仏典の伝来・翻訳が進んで天台宗・禅宗・浄土宗などの諸宗派が成立した。
④山川詳説	東アジア文化圏の形成	【唐代初期の制度と文化】 この時代には、道教・仏教が権力者の保護を受けて栄えた。外国との交流が活発になったことを受け、玄奘や義浄がインドを訪れて仏典をもち帰った。仏教が中国に定着したことで、浄土宗や禅宗など中国独特の宗派も形成された。
⑤山川高校	東アジア文化圏の形成	【唐代の制度と文化】 この時代には道教・仏教が権力者の保護を受けて栄えた。玄奘や義浄がインドを訪れて仏典をもち帰り、やがて、浄土宗や禅宗など中国独特の宗派も形成された。
⑥山川新	隋唐帝国と東アジア	【唐代の制度と文化】 唐代には仏教が帝室・貴族の保護を受けて栄えた。玄奘や義浄はインドから経典をもち帰って大規模な翻訳事業をおこなった。もともと外来の宗教であった仏教はしだいに中国に根づき、浄土宗や禅宗など中国独特の宗派も形成されてきた。
⑦第一	唐と近隣諸国の動向	【シルクロードと国際都市・長安】 また、在来の道教・仏教のほか、ゾロアスター教・マニ教・「ネストリウス派」キリスト教（景教）などの宗教も伝播した。

仏教に関連する項目では、活躍した僧侶として玄奘・義浄が取り上げられることが多く（①②④～⑥）、また、こういった僧侶らが中国にもたらした仏典が漢訳され教理の研究がすすんだとの説明が付される。そして、もともとインド発祥の仏教は、中国においては外来宗教であったことを前提に、次第に中国に根づき、独自の仏教へと変貌し、浄土宗や禅宗などの独特の宗派を形成したとする（①～⑥）。「指導要領解説」には、「中学校社会科や「歴史総合」の学習を踏まえ、日本の歴史との関連にも配慮しつつ、世界の歴史への興味・関心を高め、生徒が抱いた疑問や追究してみたい事柄について表現した問いを基に、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色を考察し…」[p.272]とあり、また、「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解する」[p.273]ことも目標としてあげられている。さらに、「小・中学校では日本の歴史や日

本及び世界の地理の学習が主におこなわれているという現状を踏まえ、そこで習得した知識を手掛かりに世界の歴史の学習へと導き、中学校と高等学校の学習の円滑な接続を図るとともに…」とある [p.274]。日本における仏教の展開に中国仏教が無関係であったはずはなく、「指導要領解説」をふまえるならば、唐における仏教にかかわる記事も日本とのつながりが意識されることが望ましいであろう。

この点でいえば、ほとんどの教科書が諸宗派のなかでも浄土宗や禅宗を取り上げているのに対し、①では最澄や空海をとりあげ、②では浄土宗・禅宗のほかに「密教」をとりあげていることが注目される。浄土宗や禅宗が日本文化に大きな影響を与えたことは言うまでもないが、最澄・空海および彼らが伝えた密教も、日本の平安仏教の展開に与えた影響を考えるうえでも重要となろう。また、中国に仏教が伝来して以降、僧侶らが行ってきたのは仏典翻訳や教理の研究だけではない。布教を行うほか、時に政治と密接にかかわることもあった。たとえば、唐の支援の下で『仁王護国般若波羅蜜多經』（以下、『仁王經』と略す）のような護国經典が翻訳されたり、反乱鎮圧において密教の祈祷が大きな力を発揮したことなどは〔藤善 2004、中田 2006 など〕、仏教と政治とが切り離せない関係にあったことを示す。そうした前提があれば、唐に渡った空海が長安でみたこと・学んだことは何か、そして日本に伝えたのは何かを考察することが可能となり、「探究」にふさわしいテーマとなろう。たとえば、空海の記した文を集めた『性靈集』の巻四におさめられている朝廷への上表文「奉為國家請修法表一首」には、空海が長安で目にしたことが以下のように記されている<sup>14)</sup>。

……城中城外も亦た鎮国念誦道場を建つ。仏国の風範も亦復た是くの如し。其れ将来する所の經法中に仁王經・守護国界主經・仏母明王經等の念誦の法門有り。仏は国王の為に特に此の經を説く。七難を摧滅し、四時を調和し、国を護り家を護り、己を安んじ他を安んず。此の道の秘妙の典なり。…

#### 【現代語訳】

宮城の内と外（あるいは長安城の内側と外側？）にも国を鎮めるために真言の法を修する道場を建てている。仏の国としての風格とはまさにこうである。日本に将来した經典に基づいて修する秘法のなかには仁王經・守護国界主經・仏母明王經などを心に念じ、口に真言を読誦することの教えがある。仏は、国王のために特にこれらの經典を説いた。仁王經で説かれる七種の災難を打ち砕き、春夏秋冬の四時を調和し、国を護り、家を護り、自分を安らかにし、他人を安らかにするという。仏の道の中で最も秘密にして靈妙な經典である。

ここに描かれているのは、仏教經典『仁王經』等の諸經典の法力でもって国家が守護され、世の平安が保たれている、という空海がみた長安の「日常」である。空海は、長安において仏

教に基づく国家鎮護がなされていると上表し、それを日本で実践しようとしたのである。この資料から、『仁王経』は誰によって翻訳されたのかといった基本的な問いだけでなく、空海がみた9世紀初頭の唐の長安で、何故『仁王経』のような国家を守護する仏典が必要とされたのか、その時の唐はどのような状況に置かれていたのか、といった唐内外の政治情勢と絡めて考察することも可能だろう。また、日本中世の顕密仏教への発展を考えれば、唐から伝わる密教は外せないのではないだろうか。

そして、仏教と政治との関係を考えるうえで極めて重要な出来事である「会昌の廃仏」についての言及が、教科書にみられないことに注意しておきたい。近年の唐代史研究においては、氣賀澤保規・石見清裕をはじめ、「会昌の廃仏」は、単なる仏教の弾圧ではなく、唐における排外主義のあらわれであり、唐が多民族王朝としての性格を失ったことを表す出来事であったとみている〔氣賀澤 2005、pp.286-288／石見 2009、pp.136-142〕。安史の乱以降、唐の勢いは翳りをみせ、それにかわってウイグル・チベット（吐蕃）が勢力を伸長し、東部ユーラシアでは、ウイグル・チベット・唐の三国が鼎立する状態がしばらく続くことになる。ウイグルやチベットなどの圧迫を受けるなかで、唐は次第にかつての唐の国際的性格を失い、その内部では外国のものへの反感がたかまわっていく。ところが、9世紀半ばになると、ウイグルが崩壊し、チベットも国内での混乱などにより、唐はこれらの外圧から解かれるにいたった。ここで、それまで内部に溜まっていた外部（外国）への反発のエネルギーが一気に噴出することとなり、「会昌の廃仏」へとつながっていくのである。「会昌の廃仏」は、仏教のみならず、ゾロアスター教・キリスト教・マニ教といった外来の宗教を対象とした宗教弾圧だったのであり、当時における「反グローバリズム」ともいうべき排外主義のあらわれでもあった。つまり、「会昌の廃仏」は、唐内部で完結する事象ではなく、諸地域の深いかかわりのなかで起きた動きであり、唐が国際的性格を失う象徴的な出来事であった<sup>15)</sup>。指導要領で求められる、諸地域との関係から唐を理解するという点においても、「会昌の廃仏」は、ユーラシアの東部の政治的変動と密接にかかわる出来事であり、唐の変化を理解する上でも重要な出来事である。さらには「指導要領解説」のいうか「歴史的経緯をふまえた地球世界の課題の探究」にもつながるテーマとなりうるだろう。以上のような事例を取り上げることで、仏教が、国内外の政治情勢と深くかかわるものであるという理解につながり、暗記項目からも脱却することが可能となろう。

## (2) ジェンダーに関わる記述

近年、歴史学においてもジェンダーへの関心が高まっている。「世界史探究」においても、そうした動向をふまえており、唐代に関連するものとしては、教科書のなかでも以下のように取り上げられている。

②実教：Approach ジェンダー「元気な女性から、しとやかな女性へ」

- ⑤山川高校：探究しよう「唐の女性はどのような生活をしていたのだろうか」
- ⑥山川新：「騎馬女性俑」の解説（唐代は、女性が馬に乗って外出することも珍しくなかったが、その後の時代には、儒教道德の普及とともに、「女性は家のなかで暮らすもの」という規範が強くなっていった。）
- ⑦第一：テーマ1「世界史のなかの性差」の「2アジアにおける女性～18世紀以前～」の「東アジアにおける女性」5「則天武后」の項目。  
テーマ3「唐の文化」の「活動的な唐代の女性」

②・⑤・⑥・⑦（⑦についてはテーマ3）はともに、唐が遊牧系の北朝の流れをくむ王朝であることが前提となって書かれている。北朝では母系の影響力が強く、女性には「闊達さ」「強さ」「自由」がみられたが、時代を下るとともに「男は外、女は内」といった儒教的な規範が浸透していったとされており〔三成・姫岡・小浜 2014, pp.66, 70〕、教科書はそのことをふまえているのだろう。唐が遊牧国家との関係のなかから生まれてきた王朝であることが、このジェンダーの規範の変遷を通して読み取ることができるようになっていく<sup>16)</sup>。

また、上記の⑦第一でもとりあげている則天武后（武則天）については、ほとんどの教科書でとりあげられている。以下、武則天の記述をとりあげておく。

- ①東書：高宗の死後、皇后の則天武后が帝位につき、一時、国号を周と称するなどの混乱はあったが（\*）、8世紀初めに即位した玄宗は、内政を整え、国境地域には節度使が指揮をとる軍団を配置して、国の守りを固めた（開元の治）。
- \*注：一方で則天武后は、科挙官僚を積極的に登用し、政治の担い手とした。中国史上唯一の女帝である。また、則天武后の死後、武后の子・中宗の皇后である韋后も政権を奪おうとしたが、失敗した。このように女性が政治に介入したことを否定的にとらえ、のちに両者はあわせて「武韋の禍」とよばれた。
- ②実教：7世紀末、高宗の死後、皇后の則天武后が中国史上唯一の女帝の位につき、一時、国号を周と称した。彼女は、科挙によって新興の商人層・地主層出身者を官僚に登用する道をひらいた。その死後の混乱を取捨して即位した玄宗は、国政の安定につとめた（開元の治）。
- ③帝国：7世紀末、高宗の皇后であった則天武后（武則天）が皇帝となって国号を周と改めた。その死後の混乱を収めて唐を復活させた玄宗は、政治を引き締め、国政改革に努めた（開元の治）。則天武后から玄宗の時代、唐初期の統治体制の切り替えが進んだ。
- ④山川詳説：7世紀末に皇帝となった則天武后（武則天）が科挙官僚を重用したことで、政治の担い手は貴族から科挙官僚へと移りはじめた。8世紀初めに体制の立て直しをはかった玄宗は、農民からの徴兵をやめ、傭兵を用いる募兵制を採用して、辺境においた

節度使に軍団を指揮させた。

- ⑤山川高校：7世紀末に皇帝となった則天武后（武則天）（\*）が科挙官僚を重用したことで、政治の担い手は貴族から科挙官僚へと移りはじめた。8世紀前半には、均田制・租調庸制が崩れ、皇帝の玄宗は農民からの徴兵にかえて、傭兵を用いる募兵制を採用し、辺境においた節度使に軍団を指揮させた。

\*枠外の補足 則天武后：高宗の后で中国史上唯一の女性皇帝となり国号を周（690～705）とした。その治世に対し、密告を奨励したなどの否定的評価と、改革者という肯定的評価が併存する。彼女が制定した則天文字はすぐ撤廃されたが、他地域では長く使用され、日本でも江戸時代の水戸藩主徳川光圀の「圀」として残っている。

- ⑥山川新：7世紀に末に武則天（則天武后）（\*）が帝位についた際、科挙官僚を積極的に任用したことは、政治の担い手が古い家柄の貴族から科挙官僚へと移ってくる一つの転機となった。8世紀初めに即位した玄宗の治世は繁栄の時代であったが、商業の発達にともない貧富の差が開き、没落して逃亡する農民が増え、均田制・租調庸制とともに府兵制も崩れていった。

\*注：高宗の皇后であったが、高宗の死後帝位について国号を周（690～705）と改めた。中国史上唯一の女性皇帝である。

- ⑦第一：小項目中には記載なし。「テーマ1世界史のなかの性差」の「東アジアにおける女性」の「5 則天武后」に「唐の3代皇帝の皇后。病弱な夫にかわって実権をにぎり、のちに自ら皇帝となった。反対勢力を弾圧したが、一方で有能な科挙官僚を登用した」とある。

則天武后が中国史上唯一の女性皇帝であることはほとんどの教科書で説明され、かつてのように女性が政治を乱した（「武韋の禍」）とする記述はみられない。むしろ、新興の科挙官僚に登用の道を開いたことを記すなど、再評価がなされている。ただし、周建国を「混乱」とし（①）、武則天の退位・死後の韋后や太平公主に女性が活躍する時期を「死後の混乱」とする一方で（②③）、これに続く玄宗は、「内政を整えた」（①）、あるいは混乱を「収拾した」、体制を「立て直した」とする（②③④）。「政治を乱した」女性と「政治を正した」男性という比較の構造は、少なからず残っているように思われる。

ところで、多くの教科書で則天武后が中国史上唯一の女性皇帝であると言及するものの、なぜ中国において則天武后を除き女性は皇帝になれなかったのか、あるいは則天武后はいかにして皇帝になったのかという基本的な説明はない。これに関して、例えば『市民のための世界史改訂版』では次のように記される。

宗教面では、インドにおいて仏教が廃れてくると、替わって吐蕃とともに唐が仏教世界を



擁護する存在となった。こうした状況のもと、新たな仏教の宗派が数多く現れ、それが中国仏教として定着し隆盛をきわめた。武則天（則天武后）が皇帝に即位し、中国史上において唯一の女帝となったのも、女性の地位が比較的高いとされる唐の社会的な風潮に求められるばかりでなく、こうした仏教の思想を巧みに利用した結果でもあった [pp.59-60]。

下線部にあるように武則天が即位するにあたり、「仏教の思想を巧みに利用した」ことが取り上げられている。具体的な思想内容についての言及はないものの、少なくとも、「仏教」が即位を可能にする役割を果たしたことがわかる。ここから、i. そもそも皇帝とはいかなる思想に裏付けられた存在なのか、ii. 中国において女性が皇帝になることを阻む考え方は何かなど、中国政治におけるジェンダーの問題、その背景にある思想を「探究」することが可能となろう。儒教的なジェンダー秩序のなかにあって、仏教が武則天の皇帝即位を正統化する重要な役割を果たしたことは<sup>17)</sup>、唐代史研究においては既に繰り返し述べられてきたことである。それでもなお、仏教に関わる事象は、あくまでも「文化」の項目に限定して触れられるにとどまり、政治の文脈で取り上げられることはなく、政治と宗教との密接な結びつきが示されることはない。仏教が果たした政治的役割などの世俗性についても考察の対象となるような教科書の記述が求められる。

## おわりに

本稿では、「世界史探究」の教科書記述のうち、特に唐代に絞り、その特徴を概観した。これまでの唐代史の記述プロットについては大幅な変更は見られないものの、中央ユーラシアとの関係を特に重視した視点が積極的に取り入れられ、近年の研究動向が反映されていることがうかがえる。その一方で、中央ユーラシアとのつながりを前面に出しつつも、安祿山の例にみられたように、中国史の枠を越えて中央ユーラシアの視点から見直しうる重要な題材であるにも関わらず、中央ユーラシアとの関係が明確に示されないなど、「探究」しづらい記述もあり、教育現場での工夫が必要となる箇所も見られた。また、文化史については、従来通り、政治や経済とは分離され、別枠のものとして位置づけられている。特に、本稿でとりあげた仏教の記述については、仏教が世俗的な場面において深く関わっているにもかかわらず、僧侶や宗派の列挙という暗記項目のままになっている。教科書の性格上、用語を増やすことは難しく、簡潔にせざるを得ないだろう。しかしより深い理解を得るためには、教育の現場においては、暗記に陥らない因果関係が分かるような題材（それに関する資料）を用いるなどの工夫も求められるだろう。

## 参考文献

荒川正晴

2024 「ユーラシア東部論再考 —「世界」の一体化への胎動を如何に考えるか—」『史学研究』318、pp.1-29

伊藤一馬

2023 「「東部ユーラシア」の現在」『神女大史学』40、pp.53-81

石見清裕

2009 「円仁と会昌の廃仏」『円仁とその時代』（鈴木靖民編）高志書院、pp.129-145

2010 「中国隋唐史研究とユーラシア史」『アジア学のすすめ 第3巻アジア歴史・思想論』弘文堂、pp.23-42

大阪大学歴史教育研究会編

2024 『市民のための世界史 改訂版』大阪大学出版会

氣賀澤保規

2005 『絢爛たる世界帝国 - 隋唐時代』（中国の歴史6）講談社（文庫版は2020）

小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編

2018 『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会

高瀬奈津子

2018 「唐代宦官家族における女性の役割に関する一試論」『法史学研究会会報』巻21、pp.164-170

中田美絵

2006 「唐朝政治史上の『仁王経』翻訳と法会 — 内廷勢力専権の過程と仏教」『史学雑誌』115 (3)、pp. 322-347

藤善真澄

2004 『隋唐時代の仏教と社会 — 弾圧の狭間にて』白帝社

古松崇志

2020 『草原の制覇：大モンゴルまで』（シリーズ中国の歴史3）、岩波書店

三成美保・姫岡とし子・小浜正子編

2014 『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』大月書店

桃木至朗

2022 『市民のための歴史学：テーマ・考え方・歴史像』大阪大学出版会

森部 豊

2013 『安祿山「安史の乱」を起こしたソグド人』山川出版社

2023 『唐 — 東ユーラシアの大帝国』中央公論新社

森安孝夫

2002 「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17、pp. 117-170

2007 『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史5）、講談社（文庫版は2016）

2011 「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」『内陸アジア史研究』26、pp.3-34.

## 注

- 1) 文部科学省 HP の「高等学校学習指導要領解説」のページにある「地理歴史編」の PDF で閲覧可能である。「地理歴史編」の URL は以下のとおりである。  
[https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt\\_kyoiku02-100002620\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf)
- 2) 森安氏の定義は次のとおりである。中央ユーラシアは、ユーラシアのうちで草原と沙漠とオアシスの優越する乾燥地帯であり、住民としては遊牧民とオアシス農耕民・都市民を主とし、森林草原地帯の半牧畜半狩猟民や半農半狩猟民を従とする地域世界である。そこに満洲と東ヨーロッパのかなりの部分やチベット高原全体は含まれるが、西アジアの大部分は含まれず、また秦嶺・淮河線以北の北中国でも関中盆地や中原や河北平原等の大農耕地帯は含まれない [森安 2011、pp.9-10]。
- 3) ①④～⑦は、隋唐からはじまる小項目となっており、魏晋南北朝期からの流れが見えにくくなっている。それぞれ隋唐期の小項目の前に、次のような小項目を置いている。①「2. 中華の分裂と多様化」、④「3. 中華の動乱と変容」、⑤「3. 北方民族の活動と中国の分裂」、⑥「3. 分裂と融合の時代」、⑦「4. 秦・漢と遊牧帝国」。
- 4) たとえば、そうした傾向は、最新の唐代の概説書である森部 2023 に顕著にみられる。
- 5) ただし、唐代史全般を著した概説書においては、仏教と政治とを切り離れた記述にはなっていない [氣賀澤 2005、森部 2023 など]。これらは、教育の現場においても参考となろう。
- 6) たとえば、ジェンダーという側面からいえば、「第三の性」とも称される存在の宦官の活躍は無視すべきではないだろう。教科書においては、⑦第一で取り上げられているが、安史の乱後、唐は「反抗的な藩鎮への対策や宦官・官僚の政争による混乱に追われていた」として言及されるにとどまる。たとえば唐代史研究の概説書においても、宦官は従来通り唐後半期に特に力を持ち、正統政治を乱したものとして位置づけられており、現在に至るまでそのプロットに大きな変化はない。その捉え方についても再検討が必要はなはずである。いっぽう、宦官の婚姻関係や家族形成の観点から、その権勢獲得の背景を考察する研究も増えており [高瀬 2017 など]、その思想的背景を含め、今後の研究の進展が望まれる。
- 7) ⑦第一のシルクロードの図および説明は、第 2 編第 2 章「古代文明の歴史的特質」の「地理風土」の「中央ユーラシア」の項目に含まれている。
- 8) ③帝国でシルクロードの言及があるのは、第 2 部第 1 章の第 3 節「中央ユーラシアと遊牧国家」においてである。
- 9) 最初は商人としてモンゴリアの突厥のなかに入っていったソグド人は、やがて突厥の影響を受け騎馬遊牧民化していった。その一方で、ソグド人としての意識とソグド人同士の結束を保っていたとされ、こうしたなかば突厥化したソグド人を「ソグド系突厥」と呼ぶ [cf. 森部 2013、pp.24-25]。
- 10) 従来、唐後半期に唐が弱体化の道へと突き進んだ要因を、ややもすれば安祿山の登場、安史の乱のみに帰するところがあった。中央ユーラシア世界の動きの中に安史の乱を位置づけようとする近年の動きは、安史の乱に対するネガティブな見方から脱却するものであり、唐の特質を中央ユーラシアとの関係から理解するうえでも有効となろう [森部 2013、pp.90-92]。
- 11) 東部ユーラシアについて言及する研究の多くが、パミール以東の東トルキスタンに限る空間を指すことがほとんどであるのに対し、荒川正晴氏は、パミール以西の西トルキスタン～アフガニスタン～インドにいたる地域を含めた空間を想定している [荒川 2024]。
- 12) ⑦第一の解説は次のとおりである。「パミール高原以東の中央ユーラシアの草原地帯と東アジアの農耕地帯は、多様な生業・言語・宗教・習俗をもつ人々が生活する多元的な空間であったが、農耕・牧畜

境界地帯を介して一体となった歴史展開がみられた。このような結びつきは、さらに海域世界を通じて日本列島や東南アジアともつながっていた。このような空間を、東部ユーラシアとよぶ。」

- 13) 東部ユーラシアに関する諸々の議論については数多くあるので、その詳細は伊藤一馬氏の研究を参照されたい [伊藤 2023]。
- 14) 宮坂宥勝 2001 『傍訳 弘法大師空海 性霊集』(上)、四季社、pp.267-271 を参照。書き下し文・現代語訳については適宜改めた。
- 15) なお、会昌の廢仏には言及がないものの、例えば⑦第一では、東部ユーラシアでは 820 年ころに唐・ウイグル・チベットとの間で会盟が成立し、三国が鼎立する状況にあったが、それが 9 世紀なかばに瓦解し、ウイグル・チベット支配下の様々な民族集団が流動化したと述べており、東部ユーラシアが大きな変動の時期にあったことが読み取れるようになっている。
- 16) 従来の研究でも唐代の女性については、則天武后や太平公主といった存在を念頭におき、「闊達さ」「強さ」「自由」が強調され、それは、北朝以後流れ込んできた「儒教的中国的倫理観とは無縁な北族世界の習俗」に由来すると説明されてきた。その一方で、同じ「北族」の金・元については、北族的習俗が女性の地位低下を招いた要因とされ、真逆の説明がなされるなど、「北族」に理由を求めることに矛盾が生じており、さらなる検討が必要とされている [小浜他編 2018、p.36 (下倉渉氏担当)、p.150 (佐々木愛氏担当)]。
- 17) たとえば、自らを下生の弥勒仏とむすびつけるなど、即位の正統化において仏教が用いられたことなどがあげられる。